

ミステリ読書案内

2022. 9. 5 発行元

第393号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

都筑道夫の代表作

『ミステリ・マガジン』編集長であり、独自のミステリ論を展開し、それを実践した玄人好みの作家・都筑道夫。その代表作を取り上げる。今回は初期の作品の中から選んでみた。若い人たちにも読んでほしいと願う。

特徴的な作品多数

都筑道夫の作品には実験的な試みが成されたものが多く、どれもが代表作になり得る要素を持っている。『なめくじ長屋捕物さわぎ』シリーズについては第334号で取り上げて紹介した。今回はそれ以外の作品の中から3作を選んでみた。

当初はデビュー長編の『やぶにらみの時計』を用意したのだが、若い人たちに薦める作品としては、初期の作品の中で特異な存在の『三重露出』と『猫の舌に釘を打て』が相応しいと考え直して入れ替えることにした。本を開いた時に驚く仕掛け

が作られているので、衝撃が伝わりやすいと考えたのだ。

3冊目を何にするか。アームチェア・ディテクティブの『退職刑事』シリーズは別枠で取り上げる機会がありそうだし、本格ミステリの形の『誘拐作戦』『七十五羽の鳥』『最長不倒距離』などは第二弾の代表作にしようと考えて、結局は『キリオン・スレイ』にした。

私がちょうど学生の頃に文庫化されて読んだ本。当時、海外ミステリを中心に読んでいた私には江戸川乱歩のドロドロより親しみを持てる雰囲気だった。都筑道夫の理論と実践を味わうのに最適。

NO.3「キリオン・スレイの生活と推理」

1972年三笠書房。私はその後の角川文庫版で読んだ。おかしな外人のキリオン・スレイが探偵役を勤めるシリーズ。雑誌『推理界』や『推理ストーリー』に掲載された作品を集めた短編集。6編収録。

第一作に当たる本書では密室で刺殺死体が見つかる事件などが出てくる。自供している男は手で刺殺したと主張しているが…。警察官などではなく、外国人のスレイが論理を振り回すことに眼目が置かれている。『退職刑事』や『なめくじ長屋』のように都筑道夫のミステリ論を具体化した作品と言える。本格ミステリ。

『キリオン・スレイ』シリーズは、本書の後『復活と死』『再訪と直感』『敗北と逆襲』と続く。いずれも角川文庫。

NO.1「三重露出」

1964年東都書房。私は1968年に三一書房から出た『猫の舌に釘をうて』との合本で読んだ。仲間内での貸し借りだったので、今私の手元に本はない。現在は光文社文庫の『都筑道夫コレクション《パロディ篇》』が手に入りやすいのではないかと。短編なども入っている作り。

一番驚くのは二段組みの部分と一段組の部分が交互に登場してくること。二段組みになっている部分は、スパイ・スリラー。山田風太郎の忍法帖のパロディ仕立て。ニンジュツの修業に取り組む外国人に「くノ一軍団」が挑んでくる展開。現実にはありえないようなさまざまな「術」が飛び出し読者を楽しませてくれる。でも、これは海外小説の翻訳という形を取っている。海外ミステリ翻訳の仕事をしてきた都筑道夫らしい思い付き。一段組になっている部分は、そのクランストンの長編『三重露出』の翻訳を担っている滝口正雄が主人公になる。ミステリの知識が豊富に出てきて楽しい。滝口が訳を進めていくと、2年前に起きたある変死事件の女性の名前に行き当たる。作者のクランストンは、何か事件に関りがあるのだろうか調べるようになる。二つの話がどう結びついていくのかが大きなポイントとなる。最後にたどり着く事実とは…。

No.2「猫の舌に釘をうて」

1961年東都書房。いろいろな版が存在するが、最新版は今年2月に出た徳間文庫。都筑道夫の仕掛けたたくさんのトリック満載の一編。

最初の一文。「私はこの事件の犯人であり、探偵であり、そしてどうやら、被害者にもなりそうだ。」と宣言している。一人称小説の記者が被害者、犯人、探偵の三役を勤めるという前代未聞の設定に挑戦する話なのだ。主人公は淡路瑛一と名乗る推理小説作家。意中の塚本有紀子を想いながらも夫がいるのでどうしようもない現実。しょうがないので、風邪を引いた有紀子の枕元にあった風邪薬を盗み、「復讐をしたつもり」の「毒殺ごっこ」を計画。ところが、コーヒーに入れられた風邪薬を飲んだ後藤という人物が死んでしまった。自分は毒殺犯人なのか…。本書の一番の特徴は、後半に延々と真っ白なページが続くこと。ページだけは片隅に印刷してあるけれども他は完全な空白ページ。読者はあっけにとられるだろう。果たしてこの白ページの意味は何か。あっちこちに振り回されて、明かされる真実とは…。都筑道夫作品の中で最も大きな仕掛けと言ってもよい。長編にしては短い作品なので一気読みできるはずだ。若い人たちは是非騙されてほしい。